

解読不可能な人・都市—殺人ナラティブと Poe

秋 好 礼 子

I. はじめに

都市の発展と共に、出版物の数も形態もページ数も増え、広い地域の人々が容易に読み物を手にするようになる。多種多様な出自や信条の人々が生活をし、華やかな社交界から裏社会まで、知ろうとしても際限がない、多面的で日々変わる都市は、自然な成り行きと言うべきか、様々な文字メディアの恰好の題材となった。19世紀初めから半ばにかけてアメリカで出版された書物の中で描かれた都市のイメージについて、Adrienne Siegelは次のように述べている。

In fact, while in the entire span from 1774-1839 only 38 urban novels were published (20 of these being written in the 1830s), in the single decade of the 1840s writers flooded the market with 173 works of city fiction; in the 1850s, with yet another deluge of 167 books.... Equally significant, in this heyday of the western frontier more than three times as many books were written about life in the city as about conditions beyond the Appalachians. We may logically infer, then, that these urban books, disseminated to a mass audience, exerted a more powerful influence on fashioning the popular conception of the American city than the remote philosophic and literary disquisitions of intellectual men of letters. (Siegel 6)

これによると、1940年代、50年代のアメリカで、都市に関する本の出版数がいかに急増したかが分ると同時に、需要と供給の関係から考えて、人々が都市に関する情報を求めていたことが想像できる¹。またこのことにより、「都市」の大衆認識に、これらの本が強い影響を及ぼしていると言えよう。本論で追っていくのは、ある特定の都市ではなく、一般に都市と言われるものと、19世紀前半の文字メディアの中で作られたフィクションとしての都市で、特にEdgar Allan Poeの作品に焦点を当て、彼が都市や都市に生きる人々をいかに描き、またそれらを描いた当時の文字メディアをPoeがいかに自分の作品

に取り入れたかということ考察する。またその過程で、犯罪や殺人を題材にした文字メディアがいかに都市の発展とかかわっているかを見ていく。

II. 殺人ナラティブ²の系譜

Poeの小説を読む前に、殺人をテーマにした文字メディアの変遷を見ていく。17世紀末から18世紀初めにかけての時代、その圧倒的主流を占めていた形態は、処刑の日の説教(execution sermon)の出版物であった。1670年代から、牧師と印刷所が提携し、殺人犯の公開処刑で読まれる説教を出版した。これには、犯罪者の改宗の言葉、懺悔、牧師との対話が含まれたが、殺人現場の描写や殺人の動機など、犯罪の詳細にはあまり言及せず、犯罪者が神の救済を強く望む精神状態に移行する過程に焦点を当てているのが特徴である。また、殺人という犯罪行為の説明に原罪の教義を結びつけることで、ニュー・イングランドのコミュニティ全体に対する道徳的指針となった³。アメリカにおける、様々な形態の文字メディアに見られる犯罪描写を歴史的に考察したKaren Halttunenは、この時代のことを以下のように述べている。

As the only regular means of public communication in colonial New England, the sermon was a powerful force in shaping that culture's values and sense of corporate purpose for a century and a half. In the hierarchical system that characterized early American culture, public ceremonies (such as executions) assumed considerable importance for transmitting information down to the common people, in a face-to-face communal setting that reinforced the social deference of listener to speaker. ...The effect of the execution sermon's treatment of criminal causality was to establish a strong moral identification between the assembled congregation and the condemned murderer. *For the doctrine that the root of the crime was innate depravity undercut any notion*

¹ 19世紀前後の都市と犯罪をテーマにしたアメリカの出版物に関しては、Siegelの他にLehuu、Bluminを参考にしている。

² 本論では、処刑の日の説教、新聞記事、小説などのジャンルを問わず、殺人に関する文字メディアを総称してこの言葉を使う。

³ この一例としてChanning参照。

of the murderer's moral peculiarity, with all humankind bound in that original sin committed by the first parents of the race. (Halttunen 12-14, emphasis mine)

アメリカで都市らしきものが出現する前は、殺人を犯した者の「特異性」は排除され、コミュニティの中の人々が共通して持っていた原罪意識でその行為は理解されていた。

ところが、移民の増加、科学の発展、人の移動や情報の拡散などが進み、様々な信条の人々が現れ、またその人々がある地域に集中して都市が形成され、そこに生きる人々の共通理解が薄れてくると、上述のようなわけにはいなくなる。18世紀末から19世紀初めにかけて、需要に合わせて都市で印刷所が急増し、図書館も1760年代にできて以来増加、交通網は拡大し、それに伴うコミュニケーションネットワークの拡大により、本、パンフレット、新聞などが多数発行、配達され、人々の間で読み回されるようになったが、最も人気があったジャンルは、死、暴力、犯罪についてのものではあった⁴。18世紀前後と19世紀前後という二つの時代の殺人ナラティブの顕著な違いは、殺人の動機を重視するかしなにかであった。植民地時代の処刑の日の説教は、宗教的・道徳的共通認識のもと、殺人行為が語られたが、19世紀前後になると、啓蒙主義や産業革命期の科学技術の発展の影響を受け、殺害の動機を明確にすることが求められた。Halttunenの研究によると、18世紀後半から19世紀初頭に出版されたアメリカの殺人に関する印刷物は、相互に関連のある三つの要素、即ち、①人間の性格に対する環境の影響、②殺人の動機、③理性のない感情を、殺人を説明するために引き合いに出すというのが一般的であった。しかし、これらの要素を全部使っても、なぜ殺人が起こったのか説明できないケースもあり、当時の殺人ナラティブの多くは、そういった人物に“cold blooded killer”や“moral alien”などといった呼称を付与し、「普

通の人間」から逸脱したもの、性格も動機も感情も解説できないものとして特徴づけるようになった⁵。

この他者を「解説できない」という感覚は、都市の出現と大いに関わる。この感覚と、植民地時代のコミュニティから都市への移行という変化との関係を説明するため、19世紀後半の社会・哲学者 Georg Simmel の「感覚の社会学」という論文に目を向けたい。Simmel は、小都市では、路上で出会うのは大体知人であったため、鉄道など公的な輸送手段が発達するまでは、人は語り合うことなく相手をじっと見たり、あるいはそうしなければならない状態になることはなかったのに対し、大都市においては、他者が語ることを聞くよりも、他者を見るものが優位になり、それによる交流の希薄化が人を不安にさせると言う。

Modern traffic, which involves by far the overwhelming portion of all perceptible relations between person and person, leaves people to an ever greater extent with the mere perception of the face and must thereby leave universal sociological feelings to fully altered presuppositions. On account of the mentioned shift, the just mentioned greater incomprehensibility of people being only seen over that of people being heard contributes to the problematic of the modern feel of life, to the feeling of disorientation in collective living, to the isolation, and that one is surrounded on all sides by closed doors. (Simmel, 2009, 573-574, emphasis mine)

この Simmel が指摘する、他者との関係を主に視覚にゆだね、その結果起こる“incomprehensible”という感覚、そしてそれによって生じる不安や孤独、混乱は、先に述べた殺人犯のモンスター化と結びつく。Poe の“The Man of the Crowd”にそのことが顕著に表れていることを次に見ていく。

⁴ これはアメリカに限ったことではない。William Wordsworth は、1801年に出版した *Lyrical Ballads* の第二版の序文で以下のように述べている。

...the human mind is capable of being excited without the application of gross and violent stimulants. ... For a multitude of causes, unknown to former times, are now acting with a combined force to blunt the discriminating powers of the mind, and, unfitting it for all voluntary exertion, to reduce it to a state of almost savage torpor. The most effective of these causes are the great national events which are daily taking place, and the increasing accumulation of men in cities, where the uniformity of their occupations produces a craving for extraordinary incident, which the rapid communication of intelligence hourly gratifies. ... When I think upon this degrading thirst after outrageous stimulation, I am almost ashamed to have spoken of the feeble endeavor made in those volumes to counteract it... (Wordsworth 83, emphasis mine)

Wordsworth はこの中で、「ぞっとする、暴力的な刺激」なしには人々は興奮せず、「都市の人口増加」が「異常な事件の渴望」を生み出していると嘆いているが、Poe や Wordsworth が生きた時代は、都市化に伴って人々がそれまでにない刺激を文字メディアに求めていた時代と言える。

⁵ Halttunen は、19世紀前後の殺人小説に見られる要素について、次のように述べている。

From 1750 to 1820, American murder literature commonly cited three interrelated factors—environmental influences on character, the motive to murder, and ungoverned passions—in an effort to explain the cause of murder for an increasingly secular age. But none of these factors, whether cited singly or combined, proved as intellectually satisfying as the earlier invocation of innate depravity. ... Some men were surprise murders, who showed few advance signs of the danger they posed to their fellow beings. ... Some murders killed out of unexplainable compulsion. ... In the second half of the eighteenth century, the “cold blooded killer” became a common fixture in American murder literature. (Halttunen 44-45, emphasis mine)

Ⅲ . “The Man of the Crowd”

Poe の “The Man of the Crowd” は、舞台を大都市ロンドンとし、あるコーヒーハウスの窓辺に腰を掛けて外を眺めている病み上がりの語り手の視点で語られる短編である。物語の前半、語り手は店内にじっとしたまま新聞広告をじっくり見たり、店内の雑然とした客たちを観察したり、曇った窓ガラス越しに街を眺めたりしている。一方的な「見る」行為で、「見られる」側との交流は一切ない。

この「見る」行為は、語りが進むにつれて、一方的な「読む」行為に変わっていく。語り手は、街行く人々の姿、服装、風采、歩き方、容貌、表情から、その人物の職業や生活状況を読み取り始める。まず、貴族、実業家、弁護士など、上流階級を代表すると思われる者に語り手の目が行くが、彼らに関しては、“They did not excite my attention” (“The Man of the Crowd” 109)⁶ と言う。次に語り手の視線は、会社員や店員、スリ、ばくち打ちに移動し、段々ロンドンの暗い面へと向かって行く。そして、ユダヤ人の行商人、物乞い、病人、売春婦、アルコール中毒者と、陰惨な観察対象、都市の底辺に生きる人々を見ると、上流階級の人間を見た時と違い、語り手はだんだん興奮しはじめる。“Descending in the scale of what is termed gentility, I found darker and deeper themes for speculation. ...all full of a noisy and inordinate vivacity which jarred discordantly upon the ear, and gave an aching sensation to the eyes.” (“The Man of the Crowd” 138) 読者に “sensation” を起こすことこそ、Poe が執筆活動で重んじたことであるが、都市は彼にとって恰好の材料であったと言えよう。

ところが、犯罪者を見ても、底辺に生きる人々を見ても、ある程度の興奮に留まり、語り手がその光景に文字通り動かされることはない。なぜなら、見るだけで、語り手はその人物の状況、来し方まで読み取ることができるからだ。語り手が窓の外を歩き交う人々をその職業でカテゴライズする時、それがいかに簡単なことであるかをわざわざ言及していることに注目したい。

Their habiliments belonged to that order which is pointedly termed the decent. They were *undoubtedly* noblemen, merchants, attorneys, tradesmen, stock-jobbers.... *They did not greatly excite my attention.*

The tribe of clerks was an *obvious* one; and here I discerned two *remarkable* divisions...

The division of the upper clerks of staunch firms, or of the “steady old fellows,” *it was not possible to mistake*...

There were many individuals of dashing appearance, *whom I easily understood* as belonging to the race of swell pick-pockets, with which all great cities are infested...

The gamblers, of whom I described not a few, were still *more easily recognizable*. (“The Man of the Crowd” 136-137, emphasis mine)

上記に引用した一節の中に、「明らかに」「一見してわかった」「種類がはっきり識別された」「間違いようもなかった」「すぐわかった」「もっと容易にすぐわかる」といった言葉が、各階級・職種の人々を顔や服装から読み取る時、必ず使われていることが分かる。しかも、それ程長くない一節の中で執拗な程に、念入りに連発される。このように簡単に読み取ることができる人物に対して、語り手の興味はそそられることはなく、この解説行為は単なる暇つぶしの娯楽でしかない。

語り手が真の興奮を感じるのは、解説することができない人物に遭遇した時である。群衆を観察しているうちに、語り手は 65 歳から 70 歳と思しき男性を目にする。その時の描写は次のようである。

With my brow to the glass, I was thus occupied in scrutinizing the mob, when suddenly there came into view a countenance (that of a decrepit old man, some sixty-five or seventy years of age,) — *a countenance which at once arrested and absorbed my whole attention, on account of the absolute idiosyncrasy of its expression. Anything even remotely resembling that expression I had never seen before. ...As I endeavored, during the brief minute of my original survey, to form some analysis of the meaning conveyed, there arose confusedly and paradoxically within my mind, the ideas of vast mental power, of caution, of penuriousness, of avarice, of coolness, of malice, of blood-thirstiness, of triumph, of merriment, of excessive terror, of intense—of extreme despair. I felt singularly aroused, startled, fascinated.* (“The Man of the Crowd” 139-140, emphasis mine)

ここで我々は語り手の見るものがそれまでのものから変化していることに気付く。この男性を目にするまでの語り手の視線は、通りを行く人々の表層的なものにとどまり、彼らの階級や職業を読み取って楽しんでいたのに対し、今や語り手の視線はこの新たな対象となった男性の表層を突き抜け、内面的なものを見ようとしている。この視線が向く対象の変化は、人を見るという行為を「娯楽」とする範疇から、語り手自ら「危険」と言うレベルへの変化を伴うことになる。この男を見るやいなや、語

⁶ Poe 作品の引用は全て *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, vol. IV, ed. James A. Harrison (NY: AMS Press, 1965) からとし、作品名とページ番号を括弧に入れて本文中に記す。

り手はコーヒーハウスを飛び出し、尽きぬ好奇心に突き動かされて、結局夜通し、そして翌日の夕暮れまで、24時間男の跡を追いつける。この語り手の、さらには語り手が追う、群衆を求めて走り回る男性の姿こそ、先に述べた19世紀半ばの人々の都市における刺激への渴望を体現したものと言えよう。

最後に語り手は本人の面前に立ちふさがり、じっと相手の顔を見入るが、それでも結局男の素性は語り手には読み取ることができない。そして語り手が出した結論は、この男は「深い罪の象徴、罪の精神 “the type and the genius of deep crime”」 (“The Man of the Crowd” 118) というものである。解説できないというだけで、極端な結論付けのようでもあるが、解説できない人物を “moral alien” とみなした殺人ナラティブを思わせ、また、Simmel が言う、都会における見られるだけの人間の不可解さとそれによって生じる不安とを象徴しているようでもある⁷。

IV. 都市小説と推理小説

“The Man of the Crowd” はロンドンを舞台にしているが、解説できない人物のイメージは、当時の文字メディアの中で、都市を背景にしてよく描かれた。1830年代から40年代の大衆的読み物の圧倒的に人気があったテーマは、“mysteries of the city” であったと言う。パリで1842年から43年にかけて連載された Eugene Sue の *Les Mystères de Paris* がイギリス、アメリカ、ドイツで翻訳されて人気となり、これをモデルにしたミステリー・シリーズがアメリカでも続々と出た。*The Mysteries and Miseries of New York* (1848) のように大都市だけでなく、様々な都市が舞台となり、都市に巣食う犯罪組織や、貧困や劣悪な衛生状態も含めて、多面的に都市を描き出した⁸。

一方、アメリカにおける殺人ナラティブは、大衆の興味に沿うように、処刑前の説教から裁判記録 (Trial Report)、殺人ミステリー小説へと変わって行き、まさに都市をミステリアスに描いたものが流行したのと同じ時期に、殺人ミステリーも人気を博し、タイトルに “Mysterious Murder” や “Mysterious Abduction and Murder” などと、“mystery” というワードを全面に出したものが、*New York Herald* のようなペニー・ペーパーやタイム・ノヴェルをはじめ、様々な文字メディアを使って出版され

るようになった。これらの出版物は、都市は何が起こるか分からない物騒な場であることや、複雑で秘密めいた人間関係などを煽情的に描いたが、その舞台には都市がびったりであった。と言うのも、“The Man of the Crowd” で描かれたように、都市は解説不可能な状況、またそれゆえの恒常的な興奮状態を表象するため、解説できない殺人事件と都市を関連づけることで相乗効果をねらい、刺激的な読み物として巷で人気を博すようになったのだ⁹。

出版界に密接に関わっていた Poe がこの大衆人気を見逃すはずはない。ただし、ありがちな書き方に便乗するような Poe でもない。むしろそれを逆手に取った手法を次の作品、“The Murders in the Rue Morgue” で見せることを次に見ていく。Poe は、1840年の12月に “The Man of the Crowd” を出版し、翌年4月にこの作品を出版する。これは、今で言う探偵小説の最初の作品で、別の大都市パリを舞台にしている。Poe は、他の作品に見られるゴシック建築や催眠状態と同様の効果を出すことを意図して都市を舞台として採用し、解説不可能な殺人事件をテーマにして、彼の詩作の真髓である「高揚をもたらす興奮」を読者の中にかきたてることをねらいとした。当時のアメリカの警察は、犯罪捜査ではなく犯罪防止が主で、犯罪捜査課が設置されるのも、探偵という職業が出てくるのも、この作品が出て以降のことであった¹⁰。Dupin という魅力的なキャラクターは実在のモデルがいたと言うよりは、Poe の構想上生まれるべくして生まれたとでも言うようなものであり、Poe は当時の殺人ナラティブをうまく利用することで、新たな殺人小説の形態を作り上げる。

“The Murders in the Rue Morgue” において、殺人事件当夜の様子、殺害現場、死体の状況、目撃者の証言は、『ガゼット・デ・トリビューノー』という新聞の記事を通して読者に伝えられる。この事件描写の随所に都会ならではの要素がちりばめられている。例えば、被害者の親子は近所づきあいをせず、ひっそりと暮らしていたこと（この点では Dupin と語り手も同様）、多種多様な職業の人々がこの界隈で商いをしていること、またその人々が様々な国からここに来て生活していること、さらにその中には、フランス語を話すことができない人も混じっている（言い換えれば、フランス語を話せなくてもパリで生活できている）ということである。つまり、Poe は都市の都市たる所以のような要素満載の環境を作り出している

⁷ Brand は、“The Man of the Crowd” を Walter Benjamin の flaneur が事象を解釈する方法を批判するものとして位置づけている。また Brand は、都市化が進んだ19世紀半ばには flaneur の方法はもはや通用しないことを証明し、かつ読解不可能と見えるものを解明する新たなテクニックを提示する者として Dupin について考察している。Brand 79-105.

⁸ Denning 85-117 参照。

⁹ Denning の他、Lehuu 36-58 参照。

¹⁰ Halttunen 109-110.

わけだが、その生活環境で人々が日常的に目にする新聞記事が、事件に対するイメージを作っていく。以下に事件後2日にわたる新聞記事それぞれの出だしと終わりの部分を並べて引用するが、異常な事件、解明不能な事件であることを強調していることが下線の部分だけからも分かる。

“EXTRAORDINARY MURDERS.—This morning, about three o'clock, the inhabitants of the Quartier St. Roch were aroused from sleep by a succession of terrific shrieks, issuing, apparently, from the fourth story of a house in the Rue Morgue, known to be in the sole occupancy of one Madame L'Espanaye, and her daughter, Mademoiselle Camille L'Espanaye.... To this horrible mystery there is *not as yet, we believe, the slightest clew.*” (“The Murders in the Rue Morgue” 156-158, emphasis mine)

“*The Tragedy in the Rue Morgue.* Many individuals have been examined in relation to *this most extraordinary and frightful affair.*” [*The word ‘affair’ has not yet, in France, that levity of import which it conveys with us,*] “but nothing whatever has transpired to throw light upon it.... A murder *so mysterious, and so perplexing* in all its particulars, was *never before committed in Paris.*—if indeed a murder has been committed at all. The police are entirely at fault—*an unusual occurrence* in affairs of this nature. There is not, however, the shadow of a clew apparent.” (“The Murders in the Rue Morgue” 158-165, emphasis mine)

また、2つ目の引用中の、“The word ‘*affair*’ has not yet, in France, that levity of import which it conveys with us” という語り手のコメントは、当時のアメリカのメディアで「事件」という言い方がいかに軽々しく、そしておそらく頻繁に扱われていたかを示唆するもので、当時のアメリカの殺人ナラティブを Poe が皮肉っていることが分かる。新聞記事によると、殺害された死体の様子は陰惨で、娘は狭い煙突の中に逆さまに押し込まれ、母親は首も胴体も切り刻まれて、死体を持ち上げようとするも首は転がり落ちたという酷さであった。証言や状況から見て、警察も世論も犯人像を読めずにいるのだが、Dupin は、“It is only left for us to prove that these apparent ‘impossibilities’

are, in reality, not such.” (“The Murders in the Rue Morgue” 173) と言い、一見不可能に見えるものも、よく探究すれば実際は存在しないと断言する。一方の語り手は、新聞記事の抽象的・主観的な言葉に煽られる読者を代表するような立場に立つ役回りにあり、犯人像が読み取れず、挙句の果てにありがちな結論を出す。

“[W]e have gone so far as to combine the ideas of an agility astounding, a strength superhuman, a ferocity brutal, a butchery without motive, a *grotesquerie* in horror absolutely alien from humanity, and a voice foreign in tone to the ears of men of many nations, and devoid of all distinct or intelligible syllabification. What a result, then, has ensued? ...”

I felt a creeping of the flesh as Dupin asked me the question. “A madman,” I said, “has done this deed—some raving maniac, escaped from a neighboring *Maison de Santé.*” (“The Murders in the Rue Morgue” 180-181)

語り手の「読み」は、まさに解説不可能なことをした者を “moral alien” とする当時の殺人ナラティブを思わせる結論付けで、“The Man of the Crowd” の語り手の最後の言葉をも思わせる。ここで注目したい Dupin の台詞がある。“...But it is by these deviations from the plane of the ordinary, that reason feels its way, if at all, in its search for the true. In investigations such as we are now pursuing, it should not be so much asked ‘what has occurred,’ as ‘what has occurred that has never occurred before.’...” (“The Murders in the Rue Morgue” 169, emphasis mine) Dupin が追及するのは、「正常な次元から逸脱しているもの (“deviations from the plane of the ordinary”）」である¹¹。本小説、そして Dupin が登場する2作目、“The Mystery of Marie Roget” でも量的に多くのページ数を占め、小説内の世論を操作する新聞記事は、同時代の殺人ナラティブさながら、「正常な次元から逸脱しているもの」を描くことで刺激を求める読者を満足させようとする。その解説不可能性は、しばしばミステリアスな都市のイメージと重ねられるが、Poe は、解説不能とはあくまでも上っ面で、都市で広く読まれる文字メディアに創られたものであることを、先に引用した台詞の中で示唆する¹²。“The Man of the Crowd” で、語り手は「他に一度として見たことがなかった」ことが、後に都会の街を駆け回る男性を理解できない理由と自ら明らかにしているが、この語り手が人を

¹¹ これとほぼ同じ台詞が次の推理小説 “The Mystery of Marie Roget” でも使われている。

“...I have before observed that it is by prominences above the plane of the ordinary, that reason feels her way, if at all, in her search for the true, and that the proper question in cases such as this, is not so much ‘what has occurred?’ as ‘what has occurred that has never occurred before?’...” (“The Mystery of Marie Roget” 20, emphasis mine)

¹² Lehuu は、Poe が本作品を書いた時代、ニュースを書くということは物語を語るということであったと、New York Herald の例を挙げながら述べている。Lehuu 48-52.

読み取る手法は経験則に基づいたものであり、自分が経験したことがない世界（人物・行動）は、最終的には「解読できない＝悪」ということで終わりにしてしまう。しかし Dupin は、「今まで起こったことがない」、つまり経験則から外れたものこそが真実として追及し、実体以上のイメージに動かされることない。そこに、不思議とか恐ろしいとか危険といった感情はない。

本論のはじめの方で言及した Simmel は、「大都市と精神生活」という論文で、経済的・職業的・社会的生活が早いテンポでなされている大都市では、無数の人や事柄にいちいち内面的に反応しては精神的にバラバラになってしまい、人は、周囲の驚異的な流れから自分自身を守るために、合理的・客観的・即物的な態度を取るようになることを考察する。

[T]he metropolitan type of man—which, of course, exists in a thousand individual variants—develops an organ protecting him against the threatening currents and discrepancies of his external environment which would uproot him. He reacts with his head instead of his heart. In this an increased awareness assumes the psychic prerogative. Metropolitan life, thus, underlies a heightened awareness and a predominance of intelligence in metropolitan man. The reaction to metropolitan phenomena is shifted to that organ which is least sensitive and quite remote from the depth of the personality. (Simmel, 1968, 636)

まさに Dupin は Simmel が描く “metropolitan type of man” を体現する、都市的な人物であると言えよう。殺人を扱った Dupin ものの第二作、“The Mystery of Marie Roget” では、さらに新聞記事が作品の中心となり、人々を解読不可能に陥らせる。この中に出てくる新聞各社の記事も、被害者が大都市を歩いて人目に触れないのはおかしいということ、遺体に会おうとしない母親や親類の冷淡さ、大量生産された遺留品、無法者たちの餌食になった女性の類似の事件への言及など、いかにも都市的な要素を取り入れてセンセーショナルに書き立てる。しかしどれも事件の核心には至らず、事件をさらに複雑にするだけである。Dupin は、次のように喝破する。“With the public the arguments of L’Etoile have had weight.... To me, this article appears conclusive of little beyond the zeal of its inditer. We should bear in mind that, in general, it is the object of our newspapers rather to create a sensation—to make a point—than to further the cause of truth. ...” (“The Mystery of Marie Roget” 21) 「センセーションを巻き起こす」ものが事件や殺人犯そのものではなく、それを書いた文字メディアであること、多様な解釈による真実の読解不可能性によって人々が不安にさせられていることを Poe は Dupin 作品で描いてみせる。またこれは、Simmel が都市生活での重要な要素として挙げる客観性、計算可

能性、厳密さを拠り所とした姿勢を見せる、“metropolitan type of man” の Dupin の存在によってこそ、強烈に暴露される。

VI まとめ

アメリカ初期の殺人は処刑の日の説教という神聖な語りで語られ、真実の一つであったが、それは信仰を同じくする、単位の小さいコミュニティだからこそ可能であった。都市化が急速に進む 19 世紀において、殺人行為は多用に解釈され、様々な文字メディアで語られ、真実は変動するものとなった。Poe は、その変動性ゆえの解読不可能性に注目し、同時代のメディアを逆手に取って、都市を舞台にした新しい煽情的な殺人ナラティブを作り上げたと言えよう。

[参考文献]

- Blumin, Stuart M. “Explaining the New Metropolis: Perception, Depiction, and Analysis in Mid-Nineteenth-Century New York City.” *Journal of Urban History* 11. 1984. 9-38.
- Brand, Dana. *The Spectator and the City in Nineteenth-Century American Literature*. Cambridge: Cambridge University Press. 1991.
- Channing, Henry. *God Admonishing His People of Their Dury, as Parents and Masters. A Sermon, Preached at New-London, December 20th, 1786. Occasioned by the Execution of Hannah Ocuish, a Mulatto Girl*. Gale Ecco, Print Editions. 2010.
- Denning, Michael. *Mechanic Accents: Dime Novels and Working-Class Culture in America*. London: Verso, 1987.
- Halttunen, Karen. *Murder Most Foul: The Killer and the American Gothic Imagination*. Cambridge: Harvard UP. 1998.
- Lehuu, Isabelle. *Carnival on the Page: Popular Print Media in Antebellum America*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press. 2000.
- Poe, Edgar Allan. “The Man of the Crowd.” *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Vol. IV. Ed. James A. Harrison. NY: AMS Press. 1965.
- “The Murders in the Rue Morgue.” *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Vol. IV. Ed. James A. Harrison. NY: AMS Press. 1965.
- “The Mystery of Marie Roget.” *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Vol. IV. Ed. James A. Harrison. NY: AMS Press. 1965.
- Rzepka, Charles J. *Detective Fiction*. Malden: Polity Press. 2005.

- Siegel, Adrienne. *The Image of the American City in Popular Literature 1820-1870*. NY: National University Publications. 1981.
- Simmel, Georg. "The Metropolis and Mental Life." Ed. Paul K. Hatt and Albert J. Reiss, Jr. *Cities and Society: The Revised Reader in Urban Sociology*. NY: The Free Press. 1968. 635-646.
- . *Sociology: Inquiries into the Construction of Social Forms*. Vol.2. Trans. and ed. Anthony J. Blasi, Anton K. Jacobs, and Mathew Kanjirathinkal. London: Brill. 2009.
- Wordsworth, William. *The Prose works of William Wordsworth*. Vol. II. NY: AMS Press. 1967.